活 動 報 告

〈活動報告〉

「欧米におけるESDと地理教育」シンポジウム報告

筑波大学人間系に共催していただき，科学研究費成果公開シンポジウム「欧米におけるESDと地理教育」が，2015年11月1日(日)に，筑波大学東京キャンパス文京校舎で開催された。科学研究費基盤B「地理，歴史，公民を関連させた社会科としてのESD実践の構築と発信」(代表者：井田仁康）の成果を発信することが目的であり，昨年の「アジアにおけるESDと地理教育」からの一連の国際シンポシウムである。なお，後援には日本地理教育学会，日本社会科教育学会，日本地理学会地理教育専門委員会にはいっていただいた。

パネラーには，Clare Brooks氏（イギリス・ロンドン大学)，Sirpa Tani氏（フィンランド・ヘルシンキ大学)，Michael Solem氏（アメリカ地理学会）の3氏をパネラーとしておよびし，各国のESDの取り組みと地理教育について報告をいただき，その後，総合討論とした。なお，発表は英語で，日本語のハンドアウトを用意し，総合討論については通訳をいれた。参加者は，本科研の分担者のほか，筑波大学附属学校の教員をはじめ小・中・高等学校の教員，大学研究者，大学院生，官庁，教科書会社の方など関心を持たれた方が40名ほど集まり，熱心な意見交換，討議となった。なお，今回，お招きしたパネラーの方々は，国内はもとより，国際地理学連合地理教育部会（IGU-CGE）の主要メンバーであり，世界的に活躍されている研究者である。

報告については，まず，Brooks氏がイングランド地理教育の現状と課題を紹介しつつESDに言及し，地理を教える教員の役割の重要性および教員支援の大切さを述べた。また，イングランドではスキルや能力を重視しすぎたことにより，知識の獲得が不十分であることが指摘され，知識の重要性も強調されるようになった。しかし，その知識は，探究のうえに獲得される概念的知識であり，単なる暗記の知識を意味しているわけではない。Tani氏は，地理教育が生物教育と結びついており，最新のカリキュラムで軸となっている「幸福のためのエコソーシャルアプローチ」にかかわらせてESD教育について論じた。フィンランドでは，イングランドとは対照的に，より一層スキルや能力を軸とした教育が展開され，教科目としても統合されたものが実施されるようになった。特に，初等・中等教育の前半では，スキルや能力は各教科で個々で育成されるべきものではなく，総合的に育成されるべきとの理念にたっている。Solem氏は，アメリカ合衆国において，州がカリキュラムを作成する手引きとなっている地理ナショナルスタンダードのESDに関する記述を具体的に紹介した。アメリカの地理教育が，イギリスの地理教育の影響を受けていることも指摘された。

3氏の発表が終わったのちに，質疑応答から，意見交換，討論となった。討論の内容は，各国の学校教育制度，カリキュラム制度ならびに社会系科目の位置づけ方，各国の教員養成制度，社会系カリキュラムの内容（とりわけ地理的内容について)，各国のESDのカリキュラム全体における位置づけ方，各国の地理カリキュラム改革，ESDの評価方法の課題などであった。ここでは，世界で共通的にみられるESDの重要性と課題が明らかにされ，各国の歴史や世界での動向の取入れ方を反映した，独自のカリキュラムの在り方などの相違性も明らかにされ，今後の日本のESDを踏まえた教育に大きな示唆が与えられた。さらには，日本から発信する教育の必要性も再確認することができた。共生社会においては，文献やネットを通して得られる情報だけでは，わかったつもりでも不十分であり，お互いに直接意見を交わすことが，お互いの理解のためには必要不可欠であることを再認識させてくれるシンポジウムとなった。

（文責：井田仁康）

〈活動報告〉

平成27年度研究科戦略プロジェクト「上海オフィスを活用した専攻説明会と中国主要関係大学との教育研究交流」による華東師範大学・北京師範大学での教育研究交流

大学院人間総合科学研究科に属する人間系専攻群では，近年，中国からの留学生（希望者）が増えているが，専門分野について大学で十分に学んだ者は多くないのが現状である。しかし，中国の急速な発展に伴う教育諸条件の向上，教育学研究の進展を鑑みると，中国の優れた大学と交流を推進することは非常に重要な課題である。先方から優秀な中国人留学生を招き入れると同時に，本学の教員・院生が相手先大学との研究交流を積み重ねることについて，これまで以上に力を注ぐ必要がある。

そのような趣旨に基づき，心理学と障害科学の関連専攻との共同で，本学中国事務所を活用して現地で専攻進学説明会を開催し，あわせて相手先大学の研究者との研究交流を図り，本学教育学の教育研究のグローバル化を進めていく取り組みを平成25年度から本格化してきた。平成25年11月には国家教育部直轄の重点大学である北京師範大学に教員を派遣して交流を図った。平成26年度には11月に華東師範大学と北京師範大学で交流活動を実施し，平成27年３月には東北師範大学に教員と院生を派遣して教育研究交流を行った。これらの３大学は中国トップレベルの国家重点師範大学である。

以上の実績に基づいて，平成27年度は教育学関連専攻・分野でそれら３大学とダブル・ディグリー・プログラムを開設するべく，交流活動を強化することにした。

標記プロジェクトにより，11月に浜田博文，藤田晃之，上田孝典の３名の教員を華東師範大学と北京師範大学へ派遣した。

11月２日の9:30～11:30に，華東師範大学の任友群副学長ほか，教育学部教員５名との交流協議を行った。当初，任副学長は昼食をご一緒する予定だったが，急遽，北京への出張が入ったとのことで，出発前の9:30に駆けつけてこられた。その後，出席者各自の専攻分野等について相互に紹介した上で，今後，ダブル・ディグリー・プログラムの開設を念頭に，両校の教育学関係専攻の院生・教員の相互交流をさらに拡充することについて積極的な意見交換が行われた。年度内に教員と院生数名が再訪して研究フォーラム等を開催することが合意された。午後には，14:00～16:00に心理学・障害科学と合同で進学説明会を開催した。参加者は合計10名余で，そのうち教育学を志望する学生は5名程度だったが，とても熱心な様子であった。

11月３日，上海から北京へ移動し，11月４日に北京師範大学において，同様に教員の交流協議と進学説明会を開催した。10:10～11:30の協議には，教育学部の教員1名と国際交流担当者1名が参加し，今後，両校の教育学関係の院生・教員の研究・教育交流をさらに活発にしていくための方策について意見交換をおこなった。14:00～16:00の進学説明会は心理学との合同でおこない，合計16名の参加者があった。そのうち教育学の志望者は５名ほどであったが，たいへん熱心な個別相談であった。

平成28年３月には華東師範大学に教員３名と院生６名を派遣して交流を深める。また，同月，任副学長等の来筑も予定されている。東北師範大学との交流もあわせて，中国トップ３の師範大学との教育研究交流は着実に前進している。

（文責：浜田博文）

〈活動報告〉

東北師範大学との交流

筑波大学と東北師範大学との交流の歴史を少し振り返ってみると，当初は筑波大学の生命環境科学研究科が東北師範大学との窓口になっていたようである。その後，両大学の交流は全学的なものに発展していった。その間に，門脇厚司教授(当時) をはじめ，数名の教育学域関係の教授が個別に東北師範大学を訪問している。

そうしたいわば「点」のような教育学域の関係が，いわば「線」や「面」のような関係に発展してくる大きなきっかけとなったのは，2013年３月に筑波大学人間学群のグローバル人材育成オールラウンド型教育推進事業の一つとして，東北師範大学の楊暁慧学長(当時，副学長)と高地教授が筑波大学を表敬訪問し，ペスタロッチ祭にも参加したことである。その年の11月には，吉田武男教授が東北師範大学から招聘されて講演を行い，翌年の2014年９月には吉田武男教授，井田仁康教授，甲斐雄一郎教授，清水美憲教授の４名が招聘され，講演を行うとともに，附属幼稚園・小学校を訪問して授業参観を行った。

それからおよそ半年後，2015年３月，前号で報告されたように，平成26年度の「革新的な教育プロジェクト支援経費」をもとに，研究交流として，教育学域から吉田武男教授，浜田博文浜田教授，藤田晃之教授の名の教員と那楽，村松遼太，牧瀬翔麻の３名の大学院生が派遣されることになった(その様子の詳細については，前号参照)。

また，それからおよそ半年後の９月，再び前年と同じ４名の教員が東北師範大学から招聘されて講演を行うとともに，教員間でさまざまな話し合いの機会をもった。その際に，筑波大学と東北師範大学との大学院レベルのダブルディグリープログラムの実施について，同席されていた楊暁慧学長と直接交渉が行われ，その場で楊暁慧学長より，そのプログラムの実施についての内諾が得られた。しかも，楊暁慧学長より，できる限り早期実現できるようにしてもらいたい，という希望が述べられた。

それから３ヵ月後の12月上旬，今度は東北師範大学の若手研究者６名が日本を訪れ，筑波大学およぶ附属小学校を訪問した。その際に，教育学域 FD として，「筑波大学・東北師範大学教育学国際交流セミナー ―次世代型の教育学を語る―」が，人間系学系棟Ｂ532大会議室で開催された。会場は，教員と大学院生で満席状態であった。そこでは，東北師範大学の紹介からはじまり，ダブルディグリープログラム構想の概要説明が行われたあとで，日中両国の教育における今日的課題についての討議が行われた。

来年，すなわち2016年３月初旬には，ダブルディグリープログラムの実施に向けて，東北師範大学の中堅クラスの複数名の教員を筑波大学に招聘する予定である。そこで，より具体的な話が進み，このプログラムの実現に向けて大きな進展が期待される。

以上述べてきたように，筑波大学，特に筑波大学教育学域と東北師範大学との間には，ここ数年の相互交流の中で，強固な信頼関係が培われたように思われる。それも，そのつながりは，若手研究者から学長まで及ぶ多層的なものである。したがって，このような強固な信頼関係のもとに，両大学間のダブルディグリープログラム構想は，まもなく実現の運びとなるはずである。それによって，二つの大学の相互交流も盛んになり，互いの教員と学生にとって有益な関係ができることであろう。

国の政治レベルの関係が冷え込んでいるときだけに，学術的な暖かい人間的な信頼関係は殊のほか大切であり，また重要である。この二つの両大学間の友好的な関係，その象徴的なものの一つとしてのダブルディグリープログラムの実現は，その「範」となり得るに違いない。

(文責：吉田武男)